

「抱きしめる」ことが親の子に対するイメージと 子どもの行動に与える影響に関する研究（1）

今川 真治 山元 隆春 財満由美子 林 よし恵
三宅 瑞穂 落合さゆり

1. 研究の目的

人と人との間で行われるさまざまな身体接触行動のうち、相手の体幹を強く「抱きしめる」という行為は、相手に対する積極的な受容を表す行動である。それは親子関係において相互の絆を強め、特に発達の初期においては、親と子の間に愛着を形成していく上でも重要な行為である。また、子どもは愛着の対象から強く抱きしめられることにより愛されているという安心感を抱き、愛着の対象（一般的には母親）が安全基地として機能する重要な契機となる。

しかしながら現代の親による子の養育においては、子を抱きしめる行動の少なさが問題となってきている。2003年に財団法人公共広告機構が行った、「抱きしめる、という会話」キャンペーンは、新聞広告や映像メディアで繰り返し報道され、さまざまな議論を生んだ。それらの中には、必ずしも肯定的な評価ばかりでなかったこともよく知られた事実であるが、このキャンペーンの趣旨は概ね好意的に受け止められ、翌2004年には、「抱きしめる、という会話・父親編」キャンペーンも展開された。父親は母親の場合と比較して、体感を伴う生物学的な基盤が脆弱であり、一般的に子の出生直後のかかわりも少ない。さらにその後も、母親がいわゆる哺育者として、抱きしめを伴う子との密接なかかわりを継続する一方で、父親は多くの時間を家庭外で就労に費やすため、児との身体接触を含む密接な関わりを十分に持つことが難しい。このような背景から、父子相互作用は母子相互作用よりも遅れて始まるという特徴があり、さらには親子関係に重要な基盤を与える身体接触も母親側に偏る傾向が強いため、結局親子の関係そのものが母親側に偏るという極めて不健全な状態が生まれることになる。このような母親側に偏った親子関係のあり方が、母親と父親の双方に、発達していく子どもに対するどのような意識の違いを生むのかは極めて興味深い。

子どもに対する抱き行動の詳細とその変化について、例えば西條・根ヶ山（2001）と西條（2002, 2004）が、親が乳児を抱く抱き方の、子の発達に伴う変化と、親が子を抱かなくなっていく過程について研究し、この中で西條は「離抱」という概念を提唱している。この概念は、乳児とその母親とが互いの行動を変化させることによって子別れが促進されることを意味しているが、いずれにしても、乳児期から幼児期にかけて、母親を含めて保護者は、子を急速に抱かなくなっていく、そのことは、親の「〈子別れ〉としての子育て（根ヶ山：2006）」において重要な意味を持つ。子別れは親にとっても子にとっても、大きなコンフリクトを伴う発達課題上の危機のひとつであるが、就学を前にした時期にあたる5歳児とその保護者にとっては、幼児期を脱して学童期へと移行する準備段階というこの時期においては、そのコンフリクトが大きいと考えられる。そのため、5歳児の幼児を持つ親が児に対してどのような感情を持っているかを知り、さらに親と子が日常的にどのような身体接触を行っているかを把握した上で、親に子の抱きしめを再体験させることによって、子に対する感情が変化するのかを検証することは意義深い。

本研究の第1の目的は、幼稚園5歳児の父親と母親の、児との身体接触の現状を調査するとともに、その子どもに対するイメージ（対児感情）を測定し、その後、子どもを抱きしめるという行為を意図的に繰り返してもらうことで、対児感情に変化が見られるかどうかを検証することである。また、親に抱きしめられることが、5歳児の子どもにとって愛着に基づいた安心感をもたらすものであるとするならば、親に繰り返し抱きしめられることで、子どもの行動に変化が現れる可能性も指摘でき、それを検証することを第2の目的とする。

本研究で得られる成果は、種々の問題を抱える個別

Shinji Imakawa, Takaharu Yamamoto, Yumiko Zaima, Yoshie Hayashi, Mizuho Miyake, Sayuri Ochiai: Does parents' embrace of one's child affect their parental feelings and children's act in kindergarten?

の事例にも適用することが可能であり、保育の現場に新たな視点を与えるものである。

2. 研究方法

調査対象者

本研究の調査対象者は、広島大学教育学部附属幼稚園の年長組に属する35名（男児20名、女児15名）の園児と、その保護者であった。本研究では、父親と母親の比較と、男児と女児の比較がそれぞれ可能となるように園児35名を2分割し、18名（男児10名、女児8名）の園児を父親抱きしめ群として園児の父親に協力を依頼し、17名（男児10名、女児7名）の園児を母親抱きしめ群として母親に協力を依頼した。

協力していただいた父親の平均年齢は38.5歳（レンジ：29歳－45歳）、母親の平均年齢は37.9歳（レンジ：36歳－43歳）であった。

研究手続き

本研究の調査目的のひとつは、親が子を抱きしめることで、親の子に対する感情が変化する可能性を検証することであるが、園児の保護者に本研究への協力を依頼するにあたっては、これについて予め言及することが、研究結果に影響を及ぼすと考えられた。そのため、研究の開始時に、研究の本来の目的と全体像についての詳細な説明を行うことをしなかった。結果として、園児の保護者には、最初に行う質問紙調査と第1回目の対児感情調査、次に実施する抱きしめ実施実験、そして、抱きしめ実施実験後の第2回目の対児感情調査の全3回にわたる調査と実験を、各回の実施時に、それぞれ独立した研究として説明し、その都度協力を依頼した。

1) 子どもへの世話行動・共行動と身体接触に関する質問紙調査

第1回目の調査において、児の父親と母親が、どのような世話行動（親役割行動）を日常的に児に対して行い、また、児とどのような共行動を行っているかに関する質問紙調査を行った。調査内容として、着替えの手伝いや絵本の読み聞かせ、寝かしつけなどの世話行動と、朝食や夕食を一緒に食べる、一緒に入浴する、一緒に遊ぶなどの共行動について質問した。

また、父親と母親が、日常的に児とどの程度の身体接触を行っているかを、以下の11項目について、全くしなかった、したことはある、ときどきした、頻繁にした、の4件法で回答を求めた。身体接触に関する回答項目は以下の通りである。

①頭をなでる、②ほおや顔をなでる、③手をにぎる、

④肩や背中をなでる、⑤キスをする、⑥だっこする、⑦おんぶする、⑧肩ぐるまをする、⑨からだをだきしめる、⑩ひざにのせる、⑪お馬さんごっこをする

なお、上記2つの質問項目群については、児の父親と母親が実態のイメージを想起しやすいように、「この1カ月間をふり返って」回答するように求めた。また、調査対象が父親と母親の2群であることから、質問内容や選択肢の性別の偏りに基づく回答の性差ができるだけ小さくなるように質問項目内容を吟味し、両者がともに回答可能なように配慮して回答の選択肢などを決定した。

本研究で用いた質問紙では、回答時までの約1カ月間における児に対する世話行動と児との共行動を回想して回答してもらい、実際に行った行動結果のデータを収集するものではない。そのため、本調査結果は、回答者のそれらの世話行動や共行動の実施状況に関する意識を反映するものと考えられる。

2) 対児感情評定尺度

児の父親と母親が、児に対してどのような感情（イメージ）を抱いているかを調査するため、花沢（1992）の対児感情評定尺度を用いて調査を行った。この尺度は本来、子育て中の母親の乳幼児に対する母性感情を測定するためのものであったが、その後発展的に改訂され、中学生から50歳代の成人期に至るまでの広い世代を対象にした研究や、男性を含めた研究にも使用されている。この尺度では、回答者の子どもに対する親和的（肯定的）な感情を接近得点、拒否的（否定的）な感情を回避得点として表すことができ、さらにこれらより拮抗指数を求めることができる。拮抗指数は、接近感情と回避感情との相克度を表し、数値が低いほど相克度が低いことを表す。

花沢は、接近項目18項目と回避項目18項目のいずれに対しても、「そんなことはない」を0点、「少しそのとおり」を1点、「そのとおり」を2点、「非常にそのとおり」を3点として4件法で回答する方法を用い、接近項目と回避項目の各18項目の評定値を単純加算して尺度得点とした。本研究でも、方法論としては花沢のそれに倣った。しかし、後述する抱きしめ実施実験前後の、父親と母親の感情変化を、より詳細に読み取れることを可能にするため、単純な4件法（4つの選択肢のいずれかに印を付ける類のもの）ではなく、感情変化をプラスとマイナスの二極の間で直線的に変化する無段階的なものとみなし、「そんなことはない」から「非常にそのとおり」までの直線中の、自らの感情にあてはまると思われる任意の箇所を線を入れてもらうこととした。調査票回収後の回答値の換算において

は、「そんなことはない」を0 cmとしてそこから回答値までの距離を実際に測定し、「そんなことはない」の回答を0点とし、「非常にその通り」を3点とする相対得点に換算した。

下記の10日間の抱きしめ実験実施後には、実験期間中に抱きしめがどの程度できたかに関する、抱きしめ実施状況に関する質問と、抱きしめ時の様子について問う質問紙を配布し、さらに2回目の対児感情評定尺度調査票への回答を依頼した。

3) 抱きしめ実施実験

各家庭において、父親または母親に子どもを抱きしめてもらう抱きしめ実施実験について、対象者には前述の理由により、第1の目的は開示せず、第2の目的である、親が家庭で子どもを抱きしめてあげることで、幼稚園のクラスでの子どもと他の子どもとの交流や、子どもの行動が変化するかを知るために行うものであることのみを開示して協力を依頼した。

本研究でいう「抱きしめ」は、親が子どもを運んだり遊んだりするなどのいわゆる「抱っこ」とは区別し、一般的な育児のための抱きではなく、親が子どもの目線まで下がって愛情を込めて強く抱くことと定義している。例えば、泣いている子どもをなぐさめるときや、何かの競技で1等賞を取ったときに思わず抱きしめて誉めてあげるときのような抱きしめである。

抱きしめ実施の期間は平成19年11月23日（金）から12月2日（日）までの10日間とした。この期間には、10日間のうち土日および祝日を5日間含むため、父親の協力を得られやすいと考えられた。

被験者には、本期間の間、1日に1回以上、必ず児を上述のように抱きしめてもらうよう依頼した。特に、児が就寝する前（おやすみの挨拶時）には必ず抱きしめてもらうよう依頼し、それ以外は、どのような場面で抱きしめてもらっても構わないこととした。ただし、児が就寝する前に被験者が居合わせなかった場合でも、寝ている児を抱きしめてもらうよう依頼した。

1回の抱きしめ時間はおよそ10秒程度継続してもらうよう依頼したが、それよりも長くても短くても実質的には構わないことを紙面に説明した。また、抱きしめている間に被験者が児と会話を交わしても、あるいは黙って抱きしめるだけでも構わないこととし、抱きしめる方向が正面でなくても構わないこととした。

4) 幼稚園での子どもの行動観察

行動観察の対象としたのは、母親抱きしめ群の児の中から任意に選定した男児5名であった。児の行動観察はデジタルビデオカメラを使用して行い、抱きしめ前（11月6日-13日）と抱きしめ直後（12月3日-18日）のそれぞれの期間について、一人あたり5分間の

観察を12回ずつの合計60分、各期総計300分のデータを収集した。観察は、児の多くが登園してくる9時頃からは、設定された保育や行事が開始される10時半頃までの自由遊び場面において行った。

調査および実験の日程

質問紙調査と第1回目の対児感情評定尺度調査は、2007年11月16日に配布し、11月20日に回収した。11月23日から12月2日の10日間に抱きしめの実験を行った後、12月3日に第2回目の対児感情評定尺度調査票を配布し、12月7日に回収した。

3. 結果と考察

本報告では、主として第1の目的である、子どもを抱きしめることで父親と母親の子どもに対する対児感情が変化するかについての結果を報告し、子どもの行動観察の結果に関しては別報とする。

1) 児に対する世話行動

図1に、児に対して絵本などの読み聞かせをした父母の割合を示す。母親のほとんどは、可能な限り子どもに絵本などを読んでやるか、せがまれたら読んでやると回答したが、父親の多くはたまに読んでやるか、全く読み聞かせをしない（父親の33%）と回答しており、この行動が母親に偏って行われている傾向が明らかとなった。

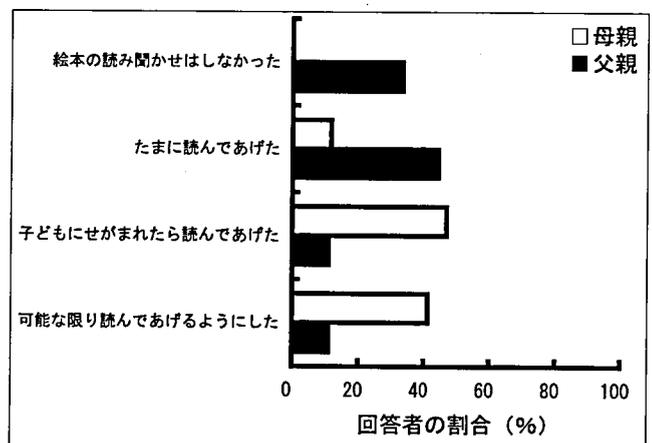


図1 児に絵本などの読み聞かせを行った父母の割合

図2に、児の寝かしつけを行った父母の割合を示す。母親の47%と父親の22%は、子どもはひとりで寝ることができるため寝かしつけの必要がなかったと回答した。また母親の47%は、ほとんど自分が子どもの寝かしつけを行ったと回答し、夫に子どもの寝かしつけを任せた母親は6%にすぎなかった。他方父親の中には、子どものいる時間に居合わせれば寝かしつけをしたと回答したものが33%おり、11%の父親が、ほとんど自分が寝かしつけをしたと回答した。

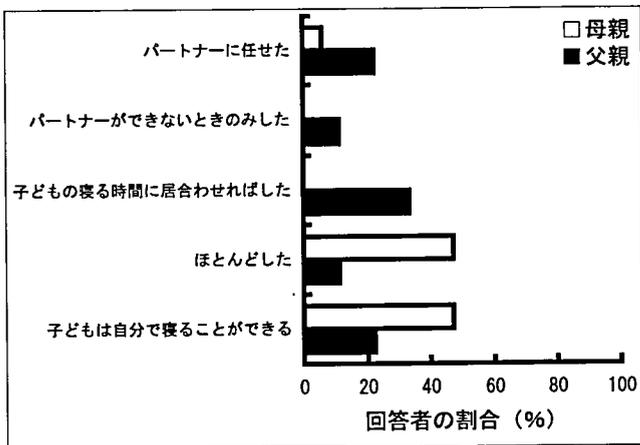


図2 児の寝かしつけを行った父母の割合

父親の児に対する世話行動に母親との相違が見られた理由のひとつは、外で就労している父親の多くが、子どもの休息時間や就寝時間に在宅していないという背景によるものとも思われる。しかし、以下に述べる子どもとの共行動に関しては、父親は平日に行えないものであっても、休日に可能な場合には行っていると回答していることと一致しなかった。

2) 児との共行動

図3に児の父母がどの程度児と一緒に朝食を取ったかの結果を示す。41%の母親は毎日必ず子どもと共食していたと回答したが、毎日ではないと回答した母親の割合も決して低いわけではなかった。また、母親の17.6%と父親の5.6%が、1カ月間程度の間、全く子どもと一緒に朝食を食べることがなかったと回答した。

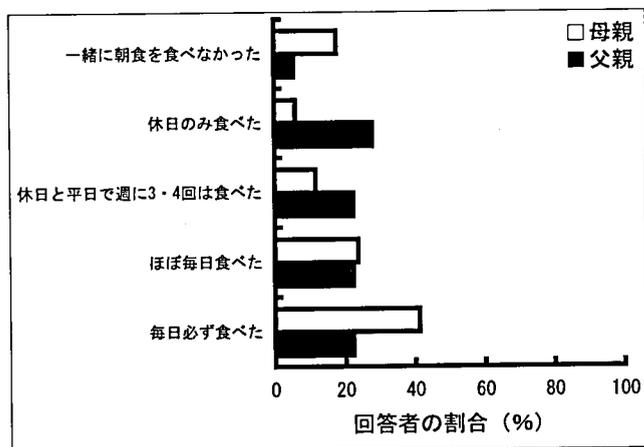


図3 児とともに朝食を取った父母の割合

図4に、対象児の父母がどの程度児と一緒に夕食を取ったかの結果を示す。朝食の場合と比較して、夕食の共食はやはり母親に偏る傾向が見られ、父親の半数においては、子どもと一緒に夕食を取ることができるのは休日のみに限られていることが明らかとなった。

しかし、回答までの1カ月間程度を回想したとき、一緒に夕食を食べたことがなかったと回答した父母は

ならず、何らかの形では子どもとの共食ができており、このことは、朝食とは異なる結果であった。

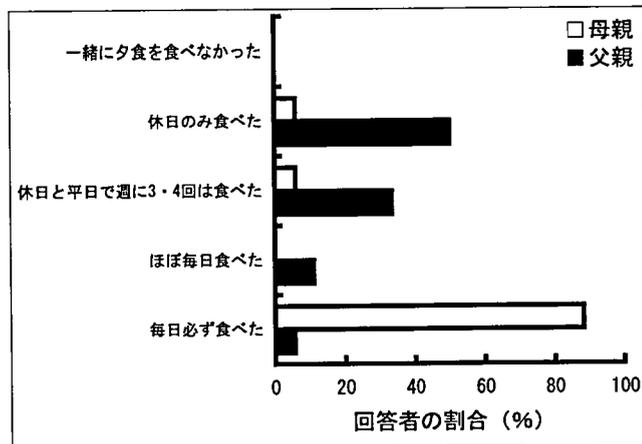


図4 児とともに夕食を取った父母の割合

図5に、児の父母がどのくらい子どもと一緒に入浴したかを示す。母親の41%が毎日子どもと一緒に入浴し、29%がほぼ毎日子どもと入浴している一方で、父親の44%は休日のみしか子どもとの入浴ができないと回答した。

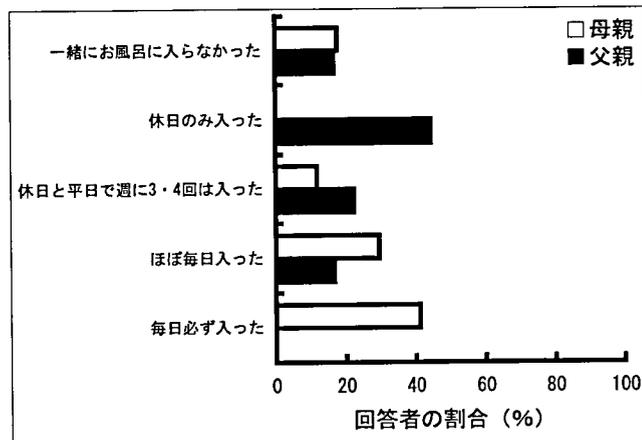


図5 児とともに入浴をした父母の割合

図6に、児と屋内遊びをした父母の割合を、また図7に児と公園や広場など、屋外に行って遊んだ父母の

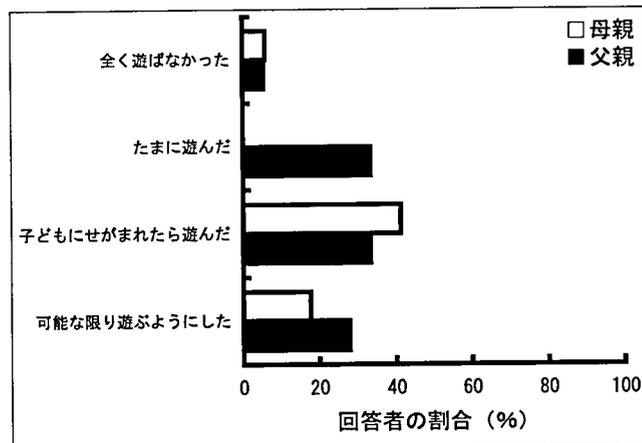


図6 児と屋内遊びをした父母の割合

割合を示す。

屋内遊びに関しては、父親と母親の回答結果に大きな差は見られなかったが、母親の方に、可能な限り遊ぶようにしたと回答するものが多かった。

屋外遊びに関しても、全体的傾向は母親と父親で類似していたが、母親には子どもにせがまれたら屋外に連れて行くものが多かったのに対し、父親の22%は子どもとの屋外遊びを全くしていないと回答した。

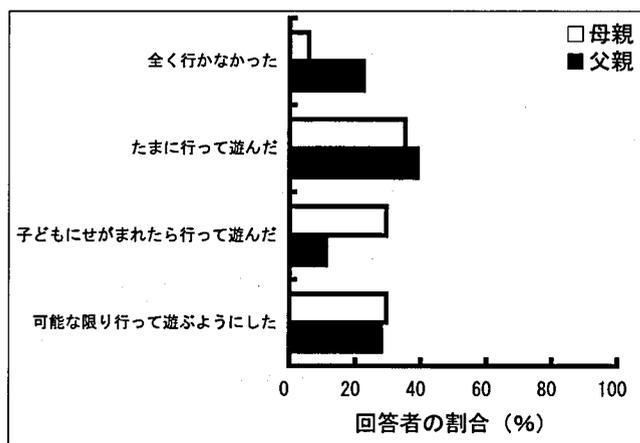


図7 児と公園や広場に行って遊んだ父母の割合

父親と母親の児との日常的身体接触行動

図8に、男児の父親の児に対する日常的身体接触行動の回答結果を、また、図9に女児の父親の児に対する身体接触行動の回答結果を示す。男児と女児の父親の児との身体接触行動を比較すると、女児の父親は男児の父親よりも児との身体接触を頻繁に行っていた。図中、キスをする以下の、児の頭やほおや顔、肩や背中などに触れたり、なでたりする行動は、親の方から積極的に行うと考えられる接触行動であるが、これらの行動を頻繁に行っていたのは女児の父親であった。特に、児に対してキスをする行動に関しては、男児の父親の20%がときどきしたと回答したのみで、80%の

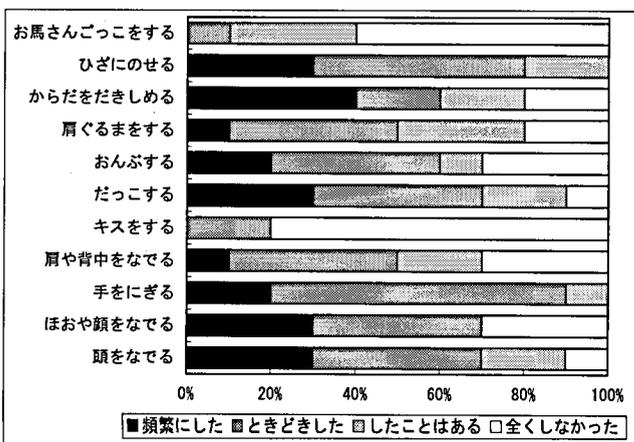


図8 男児の父親の児に対する日常的身体接触行動

父親は全くしなかったのに対し、女児の父親の50%は頻繁にしたかときどきしたと回答し、全くしなかった父親は38%であった。このことから、女児の父親は男児の父親よりも児に対して、より親密度の高い身体接触行動を日常的に行っていることが明らかとなった。

また、「からだをだきしめる」行動については、男児の父親も女児の父親も同程度に、日常的によく行っていると回答した。

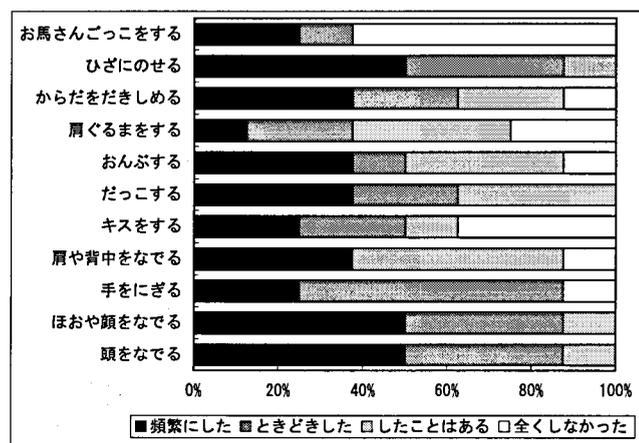


図9 女児の父親の児に対する日常的身体接触行動

図10に、男児の母親の児に対する日常的身体接触行動の回答結果を、また、図11に女児の母親の児に対する身体接触行動の回答結果を示す。男児の母親と女児の母親の児との身体接触行動を比較すると、父親の場合とは対照的に、男児の母親の児との身体接触が女児の母親よりも圧倒的に多かった。父親と同様に、キスをする以下の親の方から積極的に関わる接触行動に関して、いずれの回答項目についても、男児の母親の約80%が児に対してそれらの身体接触を頻繁に行ったと回答した。これに対して、女児の母親の中には、手を握る以外の積極的な接触行動を頻繁にしたと回答したものは多くはなかった。

「からだをだきしめる」行動に関しても、男児の母

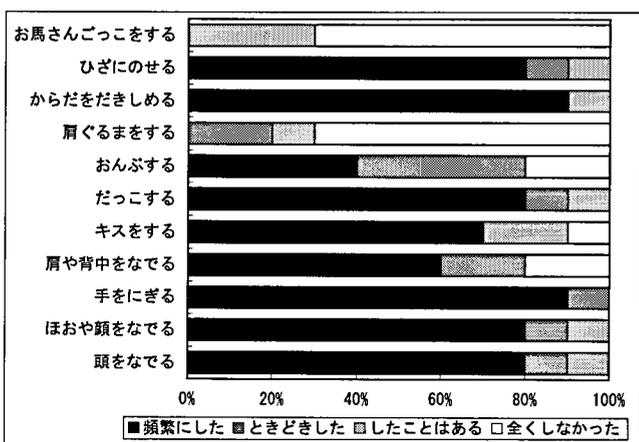


図10 男児の母親の児に対する日常的身体接触行動

親の90%が頻繁に児を抱きしめたと回答したのに対し、女兒の母親で頻繁に抱きしめを行ったのは42%しかなく、両者に大きな差が認められた。しかし、「からだをだきしめる」という子どもとの接触行動を全くしなかったものは父親にも母親にもおらず、本研究の調査対象群が、当初の予想に反して子どものからだを抱きしめる経験を日常的に持っていることが明らかとなった。これは、幼児教育に本質的に熱心な保護者が含まれやすいという本研究の対象群の特殊性と関連しているのかもしれない。

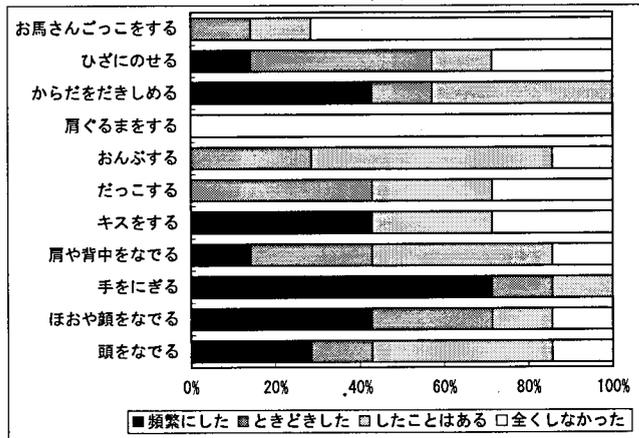


図11 女兒の母親の児に対する日常的な身体接触行動

抱きしめ実験の結果

1) 抱きしめの実施状況

図12に父親の抱きしめ実施結果を、図13に母親の抱きしめ実施結果を示す。実験的な子どもの抱きしめを依頼した10日間に関して、父親の20%は毎日抱きしめができ、40%はほぼ毎日抱きしめができ、27%はほぼ半分くらいの日数は抱きしめができたという回答をした。母親においては53%が毎日、35%がほぼ毎日抱きしめを実施できたと答え、期間中全く抱きしめができなかった母親はいなかった。この結果は、多くの父母が積極

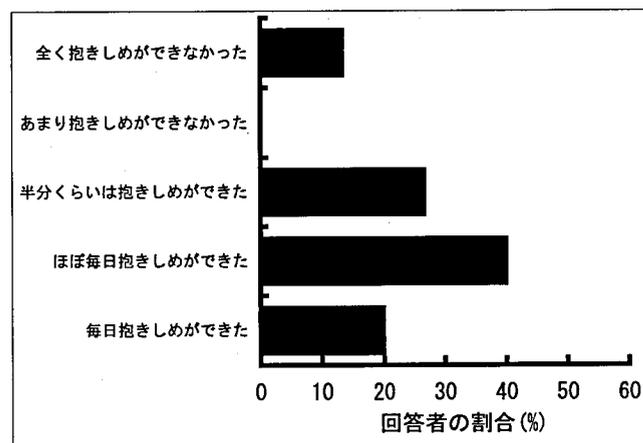


図12 父親の抱きしめ参加状況

的に本実験に協力してくれたことを示している。

なお、父親のうち抱きしめができなかったものは2名のみであったが、そのうち1名は実験実施期間中不在であり、他の1名については理由は不明であった。また、母親で抱きしめがあまりできなかった1名は、年少の子どもの方に手を取られたことを、その理由としてあげていた。

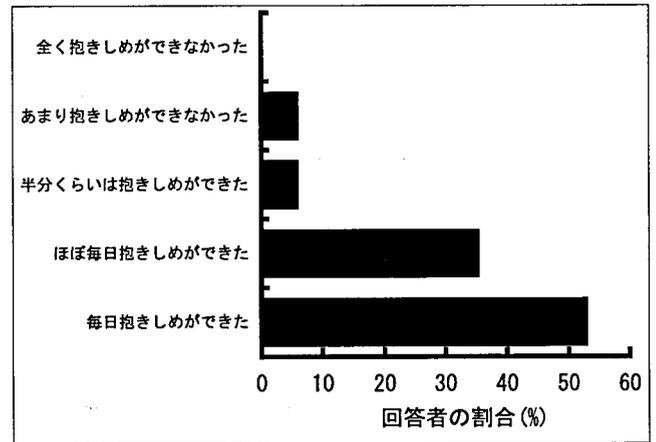


図13 母親の抱きしめ参加状況

2) 抱きしめによる対児感情の変化

図14に、10日間の抱きしめ実施の前後における、父親の対児感情の変化を示す。10日間の抱きしめによって、父親の児に対する接近得点には上昇が見られた一方で、回避得点にも若干の上昇が認められた。また、父親の回答のばらつきに関しては、抱きしめの前後において顕著な変化は認められなかった。

図15に、10日間の抱きしめ実施の前後における、母親の対児感情の変化を示す。10日間の抱きしめの前後で、母親の対児感情の接近得点と回避得点のいずれにおいても、ほとんど変化は認められなかった。また、母親の児に対する回避得点は父親と比較して小さく、さらに母親間のばらつきも小さい傾向があった。

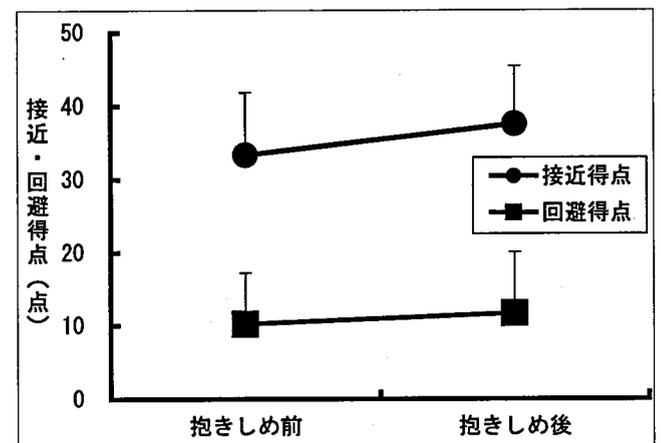


図14 父親の抱きしめ実施前後の対児感情変化

図14と図15を比較すると、父親の接近得点は、抱きしめ前には母親のそれより低かったが（父親：33.3，母親：36.8），抱きしめ実施の結果，母親の接近得点と同程度まで上昇した（父親：37.6，母親：37.2）。

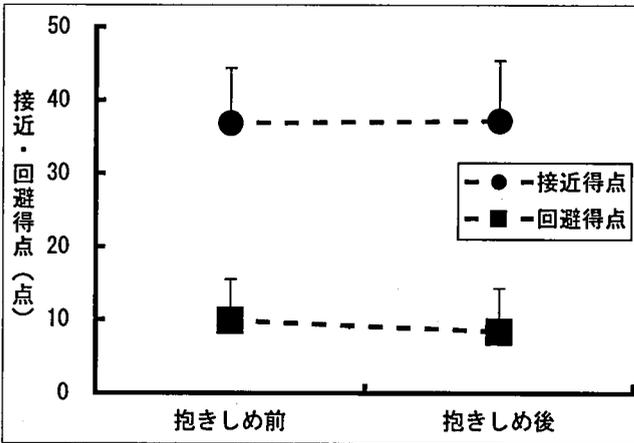


図15 母親の抱きしめ実施前後の対児感情変化

図16に父親の児に対する接近得点の，抱きしめ実施前後の変化を示す。男児の父親と女児の父親の児に対する接近得点には性差は認められず，抱きしめを行ったことで，いずれの父親群においても接近得点が増加し，児に対する肯定感情が増加する結果を示した。

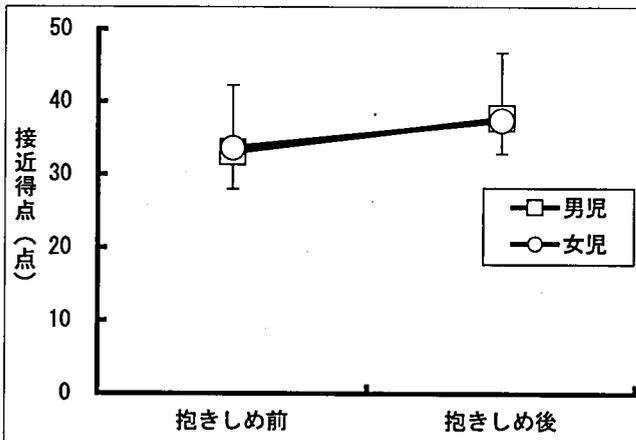


図16 父親の児に対する肯定感情の変化

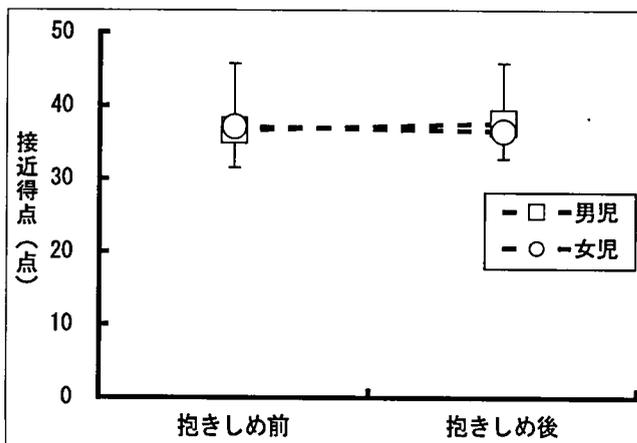


図17 母親の児に対する肯定感情の変化

図17に，母親の児に対する接近得点の，抱きしめ前後の変化を示す。母親の児に対する接近得点についても，児の性による差は認められなかった。しかし，接近得点のばらつきは男児の母親よりも女児の母親の方が大きく，この傾向は抱きしめの前後で変化しなかった。

図18に父親の児に対する回避得点の，抱きしめ実施前後の変化を示す。男児と女児の父親の児に対する回避得点には性差は認められなかったが，抱きしめの前に比べて抱きしめ後の方がわずかに上昇し，抱きしめを行ったことで，児に対する否定的な感情が若干増加したことが窺われた。また，男児の父親も女児の父親も，児に対する否定感情のばらつきは図16で見た肯定感情のばらつきよりも大きく，児に対する否定的な感情には個人差が大きいことが示唆された。

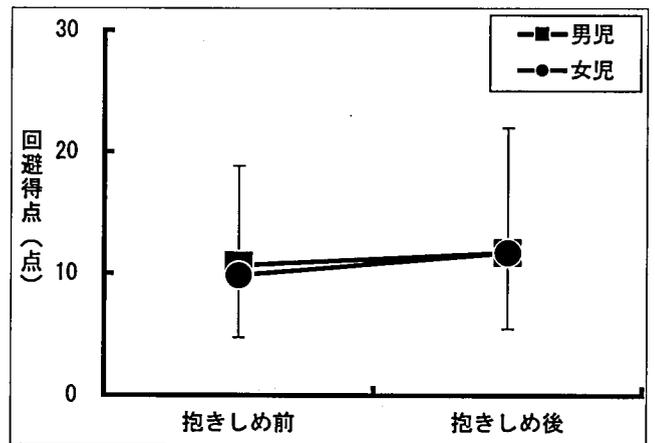


図18 父親の児に対する否定感情の変化

図19に母親の児に対する回避得点の，抱きしめ実施前後の変化を示す。男児の母親と女児の母親の児に対する回避得点には性差が認められ，女児の母親の児に対する否定感情は，男児の母親の児に対する否定感情よりも強い傾向があった。しかし，いずれの群においても，児に対する否定感情は抱きしめを実施すること

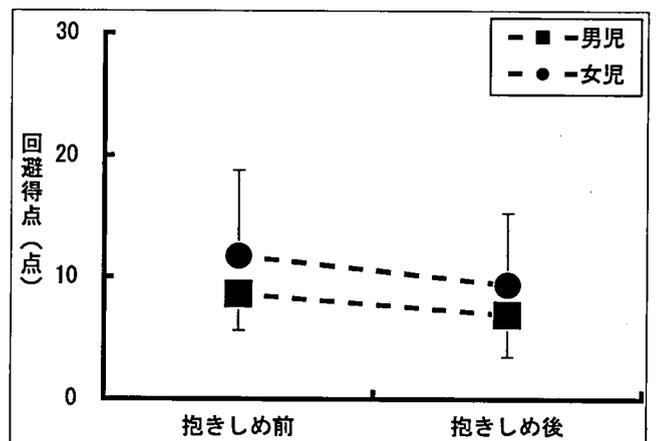


図19 母親の児に対する否定感情の変化

によって減少する傾向があった。また回避得点のばらつきは、男児の母親においては抱きしめ前後とも小さかったのに対し、女児の母親においては抱きしめの前後いずれにおいても大きく、女児の母親の児に対する否定的感情には母親の個人差が大きいことが明らかとなった。

図20に、父親の児に対する肯定的感情と否定的感情の相克度を表す拮抗指数の、抱きしめ前後の変化を示す。父親の拮抗指数は、男児群女児群ともに分散が大きく、個々の父親間の差が大きかったが、抱きしめによる変化の傾向として、男児の父親は拮抗指数が低下し、女児の父親は拮抗指数が上昇した。この結果は、子どもを抱きしめることによって女児の父親の児に対する心理的相克が増加したことを示しており、意図的に子どもを抱きしめてもらうことが、親の感情の安定にとって必ずしもプラスの結果のみを生むものでないことを示唆し、本研究のような親への関わりかけが慎重に行われなければならないことを改めて考えさせる結果であった。

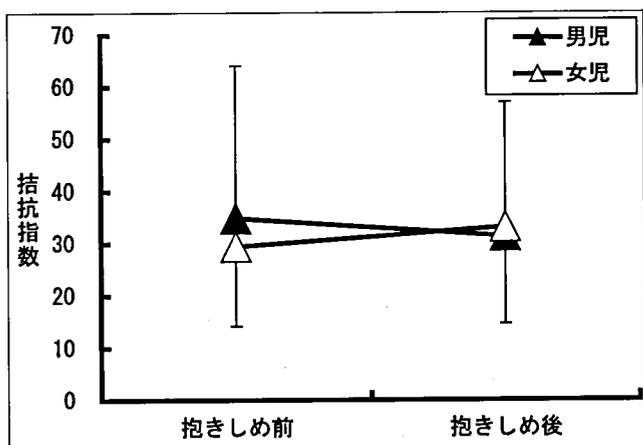


図20 父親における拮抗指数の変化

図21に、母親の児に対する肯定的感情と否定的感情の相克度を表す拮抗指数の、抱きしめ前後の変化を示す。母親の拮抗指数は、女児の母親の方が男児の母親

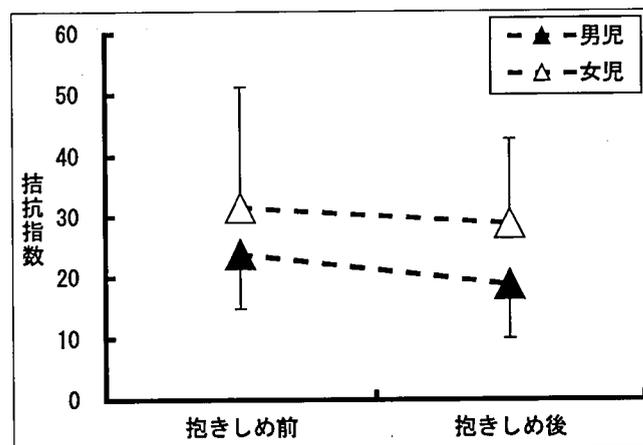


図21 母親における拮抗指数の変化

よりも抱きしめ前後ともに大きく、女児の母親の方が男児の母親よりも、児に対する感情に相克を感じていることが明らかとなった。しかし、男児群女児群ともに抱きしめ前に比べて抱きしめ後の方が若干低下する傾向が認められ、母親の心理的相克が軽減したことが示唆された。

まとめ

親が行う日常的な5歳児に対する世話行動の一部と、親と子どもとの共行動の実施状況には、父親と母親との間に差が見られるものがあった。その原因としては、それらの世話行動や共行動を父親が平日に行うことが困難であるということが大きいと思われるが、朝食や夕食を一緒に食べることや、一緒に入浴をするなどの共行動に関しては、父親も休日などを利用して行っているようであった。しかし、絵本の読み聞かせは父親の三分の一が実施しておらず、父親にとっては不得手な世話行動と言えるかもしれない。

児との日常的な身体接触行動の様相には、それぞれ男児と女児を持つ父親と母親の行動傾向の差が極めてはっきりと現れた。すなわち、父親は男児よりも女児に対して積極的な身体接触の関わりかけをしており、母親は父親に倍して偏った男児に対する身体接触の関わりかけをしているというものであった。

父親は男児よりも女児をよく抱っこし、おんぶし、お馬さんごっここの馬になってやっていた。これらの行動はもちろん、児の側からの働きかけに基づくものを含んでいることを考慮しなくてはならない。すなわち、女児の方が男児よりも父親にそのような遊びを求める傾向が強い可能性を否定できないということであり、これについてはさらなる検証が必要であろう。

しかし、子どもの頭やお顔をなでたり、肩や背中をなでるなどの親側からの積極的な関わりかけが必要な行動についても、男児の父親よりも女児の父親の方がこれらの行動をよく行っていた。特に児にキスをする行動は、男児の父親の80%がこれを行わなかったのに対し、女児の父親の25%が頻繁に児にキスをし、同じく25%は時々キスをしたと回答した。

母親の場合はさらに明確に、男児に偏った親密な身体接触をしていることが明らかとなった。男児の母親のおよそ80%は、児の頭やお顔をなでたり、肩や背中をなでたりといった積極的な身体接触の関わりを頻繁に行っていると回答した。また、男児の母親で、児にキスをしないと回答したものは1名しかいなかった。また、男児の母親の80%から90%が児を頻繁に抱っこし、ひざに乗せたりしていた。これはおそらく、この年齢の男児が女児よりも母親に対する身体接触を

より頻繁に求めることの表れであるのかもしれない、これについてもさらなる検証が求められる。

以上のように、男児の母親が女児の母親よりも児に対する偏好性を持ち、女児の母親が児とあまり親密な身体接触を持たないことは、対児感情において、女児の母親の回避得点が男児の母親のそれよりも高いことにも表れている。また同様に、母親の対児感情における拮抗指数に関しても、男児の母親よりも女児の母親の方がこの値が高く、女児を持つ母親の児に対する心理的相克の大きさが窺われる。生涯発達のさまざまな段階において、母親と女児の間には多くのコンフリクトが起こるとされているが、本研究の結果は、このようなコンフリクトが、既に5歳齢の女児と母親の間にも存在していることを示唆するものである。

本研究で検証することを目的とした、意図的に子どもを抱きしめることが、父親と母親の対児感情を変化させるかについては、結論としてそれほど大きな影響を及ぼしたとは言えなかった。これは、10日間という実験期間が短すぎたせいかもしれないし、抱きしめ行動そのものの統制が不十分であったことによるかもしれない。しかし、父親においても母親においても、児への肯定的感情は抱きしめ後に若干ではあるが上昇する傾向が見られた。その一方で、父親の児に対する否定的感情にも上昇傾向が見られたが、これは普段より親密に児と接触しようとしたことで、児のマイナスの

面に直面することが起こったせいかもしれない。いずれにしても、その結果として女児の父親の対児感情における相克度を上昇させる結果となったことは、本研究の問題点として心に留めるべき点である。

前述のように、父親や母親に抱きしめられることによって、子どもの行動にどのような影響が現れたかに関しては、行動の詳細な分析を行った後に報告する予定である。

引用文献

- 1) 花沢成一 (1992). 母性心理学. 東京: 医学書院.
- 2) 根ヶ山光一 (2006). 〈子別れ〉としての子育て. 東京: 日本放送出版協会.
- 3) 西條剛央 (2002). 母子間の「横抱き」から「縦抱き」への移行に関する縦断的研究: ダイナミックシステムズアプローチの適用. 発達心理学研究, 13: 97-108.
- 4) 西條剛央 (2004). 母子間の“離抱”に関する横断的研究: 母子関係を捉える新概念の提唱とその探索的検討. 発達心理学研究, 15: 281-291.
- 5) 西條剛央・根ヶ山光一 (2001). 母子の「抱き」における母親の抱き方と乳幼児の「抱かれ行動」の発達—「姿勢」との関連を中心に. 小児保健研究, 60: 82-90.